



# NEWS LETTER かながわ

2018年度第2号(通巻第24号)

2019年2月 神奈川支部 発行

連絡先 e-mail:jacdpanagawa@gmail.com

## 巻頭言

神奈川支部副支部長 蘭牟田洋美

今年も早2カ月が過ぎました。本年も引き続き宜しくお願い致します。

昨年12月の研修会の講演にて、3人の先生から『病気ではなく人を見る、待つこと、その子たちの能力を信じること』が教育であることを学ばせて頂きました。

さて、今回は私にとって忘れられない教えについてです。

小学校6年生の2学期のある日の教室。担任の先生が「今週、席替えをするので、隣の席にすわってほしくない人の名前を紙に書いてください」と言いました。当時、大変素直な私たちは、隣は勘弁と思う人の名前を書いて出しました。席替えが楽しみでした。

翌日、先生が「席替えについて話があります。君たちは正直に隣になりたくない人の名前を書いてくれました。でも、名前を書かれた人がどんな気持ちか考えたことがありますか。」さらに「このクラスで1人だけ白紙で出した人がいます。〇〇君です。〇〇君は嫌だと思いがいかなかったかもしれないし、いたかもしれないけれど書かなかった。先生は、みんながこの意味についてわかるまで席替えはしません。」

その瞬間、席替えだと、はしゃいでいた教室の雰囲気が静まりかえりました。

〇〇君は線が細く、声も小さく、クラスでもあまり存在感がない男の子でした。正直、人の気持ちを考えているつもりだった私はショックでした。〇〇君がかっこよく思えました。

それから先生は、丸2日間授業はしませんでした。私たちはその時間に、お互いの良さを認め、尊重することを具体的にどうしたいのかについて徹底的な話し合いをし、その結果を先生に報告し、却下され、また話し合うという時間が流れたのを記憶しています。

きれいごと、または甘い感傷と笑う方もいらっしゃるでしょう。今なら授業もしない先生とあちこちで大騒ぎでしょう。しかし、私にとっては大人になっても忘れることのない強烈な記憶です。みんなで仲良くしようと言われるより、感情を揺さぶられ、人と仲良くするという意味を考え抜いた貴重な時間でした。知識より体験です。教育を生業とする私の自戒です。

最後になりましたが、今年も平成という元号が4月30日で終わる「亥」の年です。亥の元々の意味は、草木の生命力が種の中に閉じ込められた状態を表しているそうです。

皆さまにとって、今年もこれまでのご経験を最大限発揮し猪突猛進する年になるでしょうか。それとも、自分の種をじっくりと育て温める年になるでしょうか。皆さまの支部へのご支援と叱咤激励によって、支部は育ちます。今後ともご協力の程、宜しくお願い致します。



## 神奈川支部 2018 年度 第 2 回研修会報告

2018 年 12 月 16 日（日）に、第 2・3 回資格更新研修会を「ユニコムプラザさがみはら」において実施しました。午前は、第 2 回研修会として事例検討と 3 つの分科会で、実践報告と意見交換を行いました。計 65 名の参加がありました。

### 事例検討

テーマ…運動を通して発音の誤りと集団行動の苦手さの改善を促した事例  
—通級指導教室の実践—

事例提供：佐藤久美氏（厚木市立厚木小学校）

15 名の参加がありました。個人情報保護の観点から事例の詳細については記しませんが、次のような観点で協議を進めました。

- ・運動発達の遅れを合わせもつ子どもの指導や支援について
- ・運動面の発達が集中力や意欲を高め、集団行動の改善につながったのはなぜか
- ・運動が子どもの生活全般に与える影響について

意見交換では「ゲームや遊びにからめて体を動かすことで自信や自己肯定感をもたせたこと」「PT、OT、ST とも連携しながら指導を進めたこと」が、成長発達につながったのではないかという意見が出されました。各分野で活躍する参加者同士が、1 つの事例について検討することは大変有意義であると感じました。（文責：高橋真美）

事例検討の様子



佐藤久美氏



### 分科会 1

テーマ…子どもの生活の質（QOL）を低下させる要因は何か  
—ある地域の実態調査から見えること—

話題提供：上出香波氏（共立女子大学）

神奈川県内のある地域（市営団地自治会）に依頼されて始めた子どもの QOL 調査からわかったことについて話題提供いただきました。調査の結果、地域の子どもの全国平均と比べて、ほぼ同様の QOL レベルであったものの、小学校高学年の女子は低学年の時に比べて

＜精神的健康＞や＜学校生活＞領域の平均値が下がること、親の近所づきあいが多いほど子どもの＜精神的健康＞＜自尊感情＞＜友だち＞領域の平均値が上がること、将来の夢に対して「ある」と応えた子どもは QOL が高いこと、QOL が低い子どもは、特に『精神的健康』、『自尊感情』の領域に課題があることなどが報告されました。OECD 各国の中でも自尊感情が低いと言われている日本の子どもたちにとっては、「自信を積み重ねていくというプロセスを経て、自我やアイデンティティを確立しているかが鍵」というコメントが心に響きました。自尊感情を高めるためには、成功体験を積み重ねるだけでなく、本人が自分でできたことを確認し、やり遂げた感動や爽快感・高揚感を感じられるよう周りの大人が共感していくことや良い聞き手になっていくことが重要であることが、改めて確認できました。（文責：齋藤政子）

分科会 1 の様子



上出香波氏



## 分科会 2

テーマ…きょうだい会から見るきょうだい支援

話題提供：諏方智広氏（横浜市立港南台ひの特別支援学校）

12名の参加がありました。前半は10年以上にわたり自閉症のきょうだい支援をしている「きょうだいの会横浜」代表の諏方智広先生から、きょうだい会で実践されている支援活動の年間プログラムや支援活動の特徴等を紹介していただきました。きょうだい児が子どもの場合の支援活動では、子どもは自分で情報を探していくことや、自分達で組織化していくことができないので、大人が介入しますが、大人のきょうだいの場合は、支援を受けたい人が自分で探して支援を受けているので、それを踏まえた活動をしているとのことでした。

障害のあるきょうだいをもった方の抱える問題の特徴は主に次の3点です。1点目は、個人の努力で解消することのできない(家に友達を呼べないなど)構造的な問題であることです。2点目は、心がけや環境で軽くなったり重くなったりすることです。3点目は年齢に応じて問題の質が変わってくることです。大人のきょうだいは自分で情報を集めて、同じような境遇の人と会いたい、自分の話に共感してくれる人がほしい、また将来どうなるのか情報を知りたいと思っていることが多いとのことでした。ボランティアの採用の面接や参加者の家庭訪問など会の運営の考え方やエピソードも伺え、大変興味深い内容でした。  
(文責：トート・ガーボル)

分科会 2 の様子



諏方智広氏



## 分科会 3

テーマ…インクルーシブ教育実践推進校の取り組み－厚木西高校の実践事例を通して－

話題提供：竹本弥生氏（神奈川県立厚木西高等学校）

神奈川県では県立高校改革の一環として、インクルーシブ教育システムの理念のもと、知的障がいのある生徒が学校でともに学ぶための取り組みとして『インクルーシブ教育実践推進校』を平成29年度から開始しています。そのパイロット校のひとつである厚木西高校の取り組みについて、お話しいただきました。

厚木西高校では、入学した生徒が学校生活に積極的に参加できるように、まず学校全体として、黒板周辺に掲示物はなるべく貼らない、各授業で「この時間の目標」プレートを設置して目標を提示する等の授業・学校環境のユニバーサルデザイン化に取り組んだそうです。また教育課程の工夫、インクルーシブ教育に関わるキャリア教育の実施に加えて、連携募集の生徒同士の交流の場を設けていること等、具体的な取り組みの紹介がありました。その他、一般募集と連携募集の生徒の相互理解を促すためのプログラムの実施、インクルーシブ教育に関する職員研修にも力をいれているとのことでした。参加者からは多くの質問があがり、関心の高さが伺われました。なかでも最後に紹介のあった「入学してよかった」という連携募集の生徒の作文は参加者の心に響きました。2020年度には14校に拡大する『インクルーシブ教育実践推進校』にも、このような声が続いてほしいと思います。  
(文責：橋爪美津子)

分科会 3 の様子



竹本弥生氏





## 神奈川県 2018 年度 第 3 回研修会報告

午後は、第 3 回研修会として次のテーマで講師と事例報告の先生方をお招きし、お話をうかがいました。計 87 名の参加がありました。

### 講演

テーマ：「子供に関わる人が知っておきたい病気の理解と配慮」

講師：萩庭圭子氏（神奈川県立横浜南養護学校 校長）

事例報告：浦野涼子氏・松尾千絵氏（同校 教諭）

最初に、神奈川県立横浜南養護学校（以下、南養護学校と略します）校長の萩庭先生から、特別支援教育における病弱教育の現状について解説して頂きました。先生は文部科学省から昨春に南養護学校に異動され、病気療養児への教育に尽力されています。南養護学校は神奈川県立こども医療センターの中に併設され、初等教育から後期中等教育までカバーしています。

わが国は義務教育児童生徒数の減少の一方で、特別支援教育の対象となる児童は増えています。病弱・身体虚弱特別支援学級数も平成 28 年で 1917 学級と増えました。特別支援学校は法律上 5 つの障害に該当する障害児が対象で、そのなかに病弱・身体虚弱は含まれます。しかし、教育支援資料（文部科学省）の病弱教育に関する内容は 1 割程度であり、病弱教育への理解には関係機関を含めた一層の対話の必要性があることがわかりました。特に、1）子どもたちは病気の子とひとくくりされ、子どもよりも病気に目がいく教員を含めた大人の関わり方の問題があること、2）子どもにとって病気はネガティブな体験から始まり、自己評価が上がる機会がもてないこと、3）勉強したい等、子どもたちがもつ健康的な側面に周りが気づくことの重要性があること、を理解できたことは大変有意義でした。同時に神奈川県内に学ぶ場が整っているという点にも改めて気付かされ、恵まれていることがわかりました。

後半の事例報告で、浦野先生からは重症心身障害児への教員としての関わりを通して、医療と教育との視点の違いと医療職と教員等が「医療ケア等」を行う意義を教えてくださいました。口鼻腔内吸引等が必要な事例から、環境を変えることで子どもたちができることや楽しみを増やす教育的な関わりの大切さや、そのことにより子どもたちの体調が安定し、「ケアが必要な人から何かができる人へと成長し、発達する」ということを学ぶことができました。松尾先生からは高次脳機能障害の基礎知識を入り口に、外から見えづらい障害を持つ子どもへの支援についてお話を頂きました。学校という場で高次脳機能障害の子どもたちが抱えるネガティブな感情と記憶障害、感情コントロール低下などの症状について教えてくださいました。その症状の一つである易疲労性を例に、あくびが多くなった児童を「あくびばかりしないで」という声掛けではなく、本人にとって良い休息方法を身につける支援や自分で疲れのサインを出せるような支援が必要なこと、環境調整や方法を考えることなど適切な周りのサポートが必要なことを教えてくださいました。そのことを通して、子どもたちの心に安心の種をまき、ゆっくり育てることが大切というお話は参加者の心に染み入りました。

病気療養児への行動分析を応用した関わりを含め、教育の意義を理解する貴重な機会となりました。この場をお借りして 3 名の先生方に御礼申し上げます。（文責：藺牟田洋美）



研修会の様子



萩庭圭子氏



浦野涼子氏



松尾千絵氏

## 神奈川支部2018年度 第2・3回研修会アンケート結果

アンケートにご協力いただきありがとうございました。ご意見・ご感想を抜粋、一部省略し、掲載させていただきます。

### ◆ 第2回研修会 事例検討・実践報告と意見交換

#### <事例検討会>運動を通して発音の誤りと集団行動の苦手さの改善を促した事例—通級指導教室の実践— 佐藤久美氏

- 通級指導教室という学習のフォローや言葉の訓練を行うイメージがあったが、運動面からのアプローチがあることを知り勉強になった。幼児期の経験不足や運動面の発達が日常生活の困難に大きく影響することを具体的に知ることができたので、今後の実践に生かしていきたい。
- 運動機能を高めることで他者と遊ぶことができ、集中力やコミュニケーション能力を主体的に高められることがわかった。
- 支援者との出会いが大切であり、その機会が多くの子どもたちに与えられるとよいと思った。

#### <分科会1>子どもの生活の質(QOL)を低下させる要因は何か—ある地域の実態調査から見えること— 上出香波氏

- 子どものQOLを考えるきっかけやどんなことが子どものQOLにつながるのかわかることができた。調査は小学生対象だったが、就学前の乳幼児期から親子の関わりが重要だと改めて感じた。
- 仕事で発達障害のお子さんと接しているが、QOLが低くなりやすい外的要因・内的要因もリスクがあり、よりQOLの視点を大切にしなければならないと思った。
- QOLの具体的な尺度の項目、有意差や関連が示された内容について参考になった。

#### <分科会2>きょうだい会から見るきょうだい支援 諏方智広氏

- 家族という枠の中ではきょうだいも重要な構成員の一人であることを考えると、本人支援、保護者支援と同じように、きょうだいにも支援が必要だと知った。
- きょうだい支援の会に参加するのはある程度落ち着いた家庭が多いという話が印象的だった。今後は参加したいけどできない家庭への支援も注目されていくべきなのかなと感じた。
- 「きょうだい会」の話聞き、ニーズを取り出して受け皿を作り活動されている先生を尊敬した。

#### <分科会3>インクルーシブ教育実践推進校の取り組み—厚木西高校の実践事例を通して— 竹本弥生氏

- カリキュラム、評価の実態などについて具体的なイメージをもつことができた。話を聞いて、共に学ぶことによって得られる学びのメリットを保障していくことの重要性に気付いた。
- 連携募集生徒の存在が一般入試生徒の人格形成に大きく影響を与えらると思う。厚木西高校の卒業生が社会の核となってすべての人が生きやすい社会を作っていけると素晴らしいと思う。
- これまで小中学校で行われてきたインクルーシブの取り組みやユニバーサルデザインの授業、学級づくりの将来像を具体的に聞いた。この取り組みがより多くの高校に広がり将来的にはすべての学校に広まってくれることを願う。

### ◆ 第3回研修会 講演:「子供に関わる人が知っておきたい病気の理解と配慮」

講師: 萩庭圭子氏・浦野涼子氏・松尾千絵氏

- 特別支援教育の考え方、「医療ケア等」、教育における一つ一つの行為が、ケアだけでなく教育的意味を伴ったものになるよう、プランをもって実践されている様子を知ることができた。
- 病児や「医療ケア等」について知る機会がなかったので、歴史も含め知ることができ良かった。先生方のご苦労、熱意に感激した。高次脳機能障害の子どもへの対応は、発達障害の子ども達にも応用できるものだと参考になった。
- 様々なことに対して安全を確保しつつも、その子にとって実現可能かを考え、チームで連携をとって支援していくことの大切さを多くの事例を通して再確認できた。

### ◆ 全体の運営について

- 事前申し込みは参加意欲にもつながる。可能ならば受付完了メール等があると助かる。
- 半日でも良いので、土曜日開催があるとありがたい。

### ◆ 今後の研修会で取り上げてほしいテーマなど

- ・不器用な子どもへの指導 ・ひきこもり、虐待、不登校 ・合理的配慮の現状と課題
- ・子どもの精神障害 ・就労相談、支援 ・多くの会員があまり携わっていない領域の支援等

ご意見ご要望ありがとうございました。ここ2,3年の研修テーマと突き合わせつつタイムリーで要望の高いテーマを取り上げていきたいと思っております。(研修担当より)

## 職場紹介

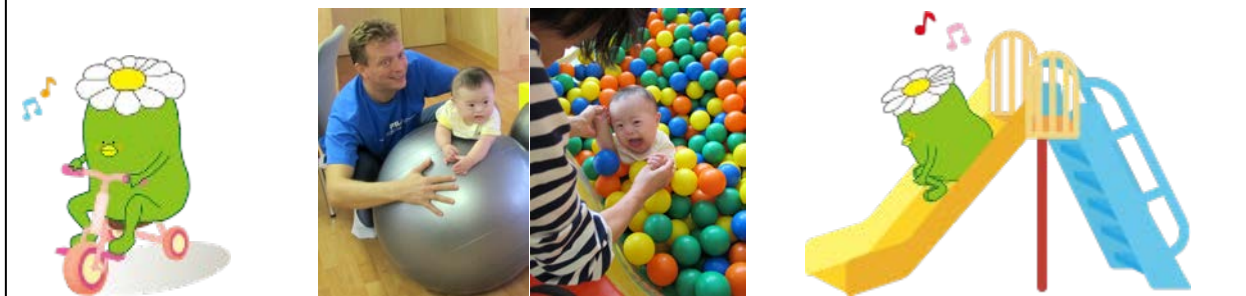
トート・ガーボル（相模女子大学 「子育て支援センター」 教授）

相模女子大学の「子育て支援センター」は2010年に開設されましたが、その紹介をします。その前身は、2009年に設立された「子育て支援室」です。これは2008年に本大学に子ども教育学科が設立されたことに伴い、子育て支援教育の一環として、また発達が気になる子どもとその保護者への支援、子育ての悩みを持つ方への援助、そして地域の子育て支援活動を行う場として設けられたものです。その「子育て支援室」が2010年に「子育て支援センター」となり、現在次のような事業に取り組んでいます。

「子育て支援センター」の運営は、現在子ども教育学科教員6名、人間心理学科教員4名と事務員といった構成メンバーで行っており、「相談事業」「子育て支援事業」「研修事業」を3つの柱としています。「相談事業」を担当している相談員は、センタースタッフである臨床発達心理士2名、臨床心理士3名、社会福祉士2名の計7名です。2017年度には、神奈川県内・相模原市内での個別相談に応じられる場の必要性に応えるものとして「子育て支援センター相談室」も開設され、心理相談を5組の親子(家族)に43回、発達相談(感覚、運動、言語など)を4組の親子(家族)に4回実施することができました。「子育て支援事業」では発達支援体操、親子教室、子どものための音楽療法、子育て応援音楽療法、オープンカフェ(サポートグループ)、女性のためのアサーティブ(自己表現)トレーニング、プレイセンター活動などを実施し、「研修事業」では子育て支援講演会やセミナーを行っています。これらの「子育て支援センター」の活動の参加者や講演会・セミナー受講者は、主に子育てに関する相談を必要とする地域の保護者や専門家で、毎回皆さんから好評を得ています。

また、相模女子大学子ども教育学科には、2019年4月より「特別支援学校教員養成課程(知的障害・肢体不自由・病弱)」が開設されます。それも含め「子育て支援センター」は、相模女子大学に設置されている唯一の臨床活動の場として、これからも大きな役割を担うことになると思っています。皆さまの相談や見学・参加のお申込みをお待ちしております。

✿ぜひHPもご覧頂けると嬉しいです。<http://www.sagami-wu.ac.jp/features/kosodate/>



### 「職場紹介」大募集！

このコーナーで職場紹介をしてくださる方を募集しています。神奈川支部に所属されている方であれば、掲載させていただきます。医療、福祉、教育、司法などお互いを知り、効果的なネットワークを構築していくためにも、ぜひご協力をお願いします。

<連絡先>

神奈川支部 広報担当宛

e-mail : jacdpkanagawa@gmail.com



## 第14回全国大会報告



『第14回全国大会：臨床発達の実践から立ち上がる研究—実践を研究へと結びつけるには—』が、2018年8月25日（土）～8月26日（日）に中京大学（名古屋キャンパス）で行われ、神奈川支部も横浜の美味しいお菓子と共にポスター発表をしてきました。

全国各支部のポスターが“名産のお菓子”と共に掲示され、有意義な情報交換ができました。ここで得られた情報を今後の神奈川支部の活動に活かしていければと思います。

- \* 『第15回全国大会』は2019年9/28(土)～29(日)に九州産業大学人間科学部で『臨床発達心理士の“維新”～生涯発達支援のアクター、アレンジャー、クリエイター～』をテーマに開催されます。詳細は、第15回全国大会ページをご覧ください。

## お知らせ

### ■ 神奈川支部 2019 年度第1・2回資格更新研修会・支部総会（予定）

日時：2019年5月19日（日）9：30～16：00 会場：鎌倉女子大学

- ・ 9：30～12：30 第1回研修会（講演会） 【1ポイント】  
『不器用な子どもの評価と支援(仮)』  
講師：松本政悦氏（よこはま港南地域療育センター 作業療法士）
- ・ 13：30～14：00 支部総会
- ・ 14：30～16：00 第2回研修会（分科会） 【0.5ポイント】

※ 詳細は、神奈川支部ホームページ、SOLTI（神奈川支部会員のみ）にて、お知らせいたします。

### ■ ニュースレターの配信について

前々回の号より、ニュースレターの配信を神奈川支部のWebサイトからのみにさせて頂いており、郵送はしておりません。今回もホームページにアップした後、SOLTIにて「アップしました」と配信させて頂きました。お近くの会員の方でご存じない方がいらっしゃいましたら、神奈川支部のホームページを見て頂けますよう、是非お知らせください。

#### <編集後記>

世の中の様々な出来事が、何かと「平成最後の～」と表現される今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。今回のニュースレターは、昨年12月の第2・3回資格更新研修会のご報告を中心にお届けいたしました。

今回のニュースレターにお気づきの点、ご意見・ご感想等ございましたら、今後のニュースレター充実のために生かしていきたいと思っておりますので、支部メールアドレス ([jacdpkanagawa@gmail.com](mailto:jacdpkanagawa@gmail.com)) にご連絡ください。

雪のちらつく日があったり、春のような陽気の日があったりと寒暖の差が激しい日々や、インフルエンザに対してもまだまだ油断ならない日々が続きますが、皆様ご自愛ください。

（広報担当 橋爪美津子・佐藤朋実）